

柿本朝臣人麻呂、石見国より妻を別れて上り

来る時の歌二首

一三一番

石見の海 角の浦廻を 浦なしと 人こそ見らめ
潟なしと 人こそ見らめ よしゑやし 浦はなく
とも よしゑやし 潟はなくとも いさなとり
海辺をさして きたたづの 荒磯の上に か青く
生ふる 玉藻沖つ藻 朝はふる 風こそ寄せめ
夕はふる 波こそ来寄れ 波のむた か寄りかく
寄る 玉藻なす 寄り寝し妹を 露霜の 置きて
し来れば この道の 八十隈ごとに 万たび
かへりみすれど いや遠に 里は離りぬ いや高
に 山も越え来ぬ 夏草の 思ひしなえて 偲ふ
らむ 妹が門見む なびけこの山